

教会会報いずみ復刊第33号

智慧ある人の教えは命の「いずみ」である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会総務部

発行者：宍戸俊介

発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL055-253-3150 URL

<http://www.atagomachi-kyoukai.org>

P1

みことば

復活の体 聖書 コリントの信徒への手紙一第15章12～49節 愛宕町教会牧師 宍戸俊介
キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っている... (12節)

これはコリント教会だけの問題でしょうか。ふだんこのことを突き詰めて考えていないだけで、ことによるとわたしたちも本当は復活を受けとめにくいと思っははいないでしょうか？

死は決して些細な事柄ではありません。近い愛する者が動かなくなる。それは本当に辛い経験です。どんなに技術が進んでも、人間は死に際してどうしようもありません。どう気持ちを引き立たせようとしても無理です。それでわたしたちは、ふだん死のことは考えまいという態度を取るようになるのです。ところが、そんなわたしたちに対し、聖書は復活を語ります。聖書はわたしたちを挑発しています。

復活の体は人間が想像して得られるようなものではありません。神様が御心のままに与えてくださるのです。38節。

神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。

40節では天上の体と地上の体が違っていると述べられています。あなたが今、地上の体の輝きだと思っているもの--それはたしかに地上では輝きかもしれないが、天上においても同じということはないのだと言われています。

また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。

コリント教会の人たちよ、あなたがたは地上の体の輝きということならばよく知っているだろう。オリンピック選手のように素晴らしい肉体を持つ人も、やがて死んで、土は土に、塵は塵に、灰は灰に還ってしまうことも知っていてそれを恐れている。しかし、わたしたちは死んで終わりになるのではない。どこかに消えるのでもない。あなたの一生は、言ってみれば種蒔きの生涯なのだ。地上の肉をもって蒔かれた種は復活して天上の体に変えられる。だから地上の体のことばかり考え、思い悩む必要はないとパウロは言うのです。

42節以下のところで、パウロは本当に言おうとすることをハッキリ言います。42～44節。

死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。

もちろん、霊の体が現れるのは、イエス様が再びこの世界を訪れて全てを完成して下さる終わりの時ですから、今の時点で霊の体がどんなであるかを知る人はいません。

復活の体がどんな体なのかと問われても誰も答えることはできません。しかし、今のわた

したちにそれが分からず、答えられないからと言って、それがないと決めつけることはできません。

パウロは終わりの話をしています。復活の希望は今の時点で手近に転がっているような慰めではなく、終わりの日に与えられる大きな慰め・希望なのです。

最初の人間アダムは、土と塵から形造られ、そこに神様の命の息が吹き入れられて生きる人となりました。しかし神様から離れて歩んだ結果、命の息が次第に抜けてしまうような結果となっています。

ところが、そんな死すべきわたしたちと、イエス様が交わりを持ってくださり、やがて滅びゆく自然の命の体とは違う霊の体をプレゼントするという約束を与えてくださいました。わたしたちは、そういう霊の体に生きる希望を与えられていると、パウロは言います。49節。

わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

主イエスのご復活は、主イエスだけに特別に起こったことではありません。やがて主が再びおいでになり、全てが完成される終わりの日には、わたしたち自身の霊的な体への進化を伴う復活の希望が与えられています。そのことを指し示す初穂の出来事として主の復活は起こりました。主イエスのご復活はわたしたちの遠い将来の希望と結びついています。

たとえわたしたちが死ぬとしても、その死を越えてなおも神様の許に存続させられる希望を抱いて、教会はこの地上に建ち続けているのです。

P2

2019年

教会全体研修会

洗礼についての話

❶ 教会生活の出発点 ❷ 洗礼のしぐさについて

講師 宍戸達氏（前 くにたち教会牧師）

2019年7月21日（日）礼拝後（講演12:45～）

宍戸達教師の紹介

1933年に山形県楯岡町（現村山市楯岡）の牧師家庭に5人兄妹の次男として生まれる。教会で育ったため幼い頃より讃美歌に親しんだが、旧讃美歌579番（54年版の561番）に歌われる「罪につきては、自ら死にたるものとおもい、神につきては、活きたるものとおもうべし」という歌詞に釈然としない思いをおぼえていた。

神学校に入り伝道者への道を志す中、信仰が心の中の観念ではなく信仰生活の事柄であると説教で聴き、わが意を得たりとの思いを強くし、洗礼の事柄を意識して学ぶようになる。

神学校卒業後、東新潟教会、仙台東六番丁教会、国立教会の牧師を歴任、2019年3月末で隠退。

聖書朗読

それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

ローマの信徒への手紙第6章3～4節（新共同訳）

今年度全体研修会のテーマについて

穴戸俊介牧師

愛宕町教会に赴任して5年目の時を過ごしています。これまで行われた4回の全体研修会では、2015年「伝道を教勢で考えない」を皮切りに、ずっと伝道と教会形成を念頭に置きながら主題を定めてきました。

最初の年に考えたことは、伝道のあり方を教勢（人数）で測らないとした上で、それならば一体、何に基づいて伝道の状況を考えたら良いのか？ということでした。聖書の中には、教会のモデルとなる神様の民の様子が語られています。わたしたちは聖書の中に伝道する教会のモデルを尋ね求め、そこに向かって教会を形作って行くべきではないだろうかということをお願いしました。

そのような1年目の学びを踏まえた形で、2年目から4年目（2016～2018年）まで、3回にわたって、旧約聖書のハバクク書から教会の姿を学びました。ハバクク書を選んだ理由は、この預言者が旧約聖書に現れる他のどの預言者とも違い、在野の立場から時の王と王国のあり方を批判するのではなく、王国に仕える預言者という立場から祈りに向かうというユニークな働きをする預言者だったからです。わたしたちの教会も、乗り越えるべき様々な課題に出遭う時、それを評論家のように批判するのではなく、祈りをもって教会の営みを支え、祝福された解決を待ち望んで歩むことが大切だろうと考えました。

毎年1章ずつを学び、3年かけて読み終えて、今年は新しい学びに向かう時でした。そんなときに示されたテーマは、私の牧会上の失敗がきっかけでした。

教会員のご家庭にお子さんが誕生して、最初の礼拝に臨んだとき、北牧師の時代には礼拝の中で幼児祝福式を行い、教会全体で幼子の誕生を感謝し祝っていたのですが、私は礼拝後の祈りの時間帯にこれを行いました。今までの経験上、礼拝の中で幼児祝福があると予想していた親御さんを悲しませてしまったのですが、それは教会形成について、北牧師が持っておられたイメージをわたしが十分に受け継いでいないことから起こったミスでした。

北牧師は教会を一つの大きな家族と考え（聖書の中にこのように考える根拠があります）、新生児が礼拝に加えられることを神様の出来事と受け止めておられました。従って、礼拝の中で、教会全体の事柄として幼児祝福を行っておられたのでした。

一方わたしは、人が教会に加えられるのは洗礼によってであると思っていたものですから、喜んで祝福があるようにお祈りをささげたのですが、それを礼拝の中に位置づけることには思いが及ばなかったのです。

祝福をすることは教会の業ですが、教会が造られてゆくのは洗礼によると考えています。

そこで今年度の研修会の主題を「洗礼」と定め、洗礼についての基本的な理解を教会全体で共有したいと願いました。幸い、神学生時代から洗礼の事柄に関心をもって長年牧会に当たって来られた隠退教師が与えられましたので、講師として話をさせていただきました。

P3～P7

講演

講演については録音がありますので、この読み上げ以外に、こちらのアドレスから講演録音もお聞きになれます。<http://www.atagomachi-kyoukai.org/2019/topic2019/topic2019kenshu.html>

『洗礼についての話』①

＊聖句は「聖書協会共同訳」聖書より引用しています。

教会生活の出発点

はじめに

洗礼は、教会の始まりから2000年ものあいだ、ずっと続けられてきました。ですから、そのあいだ、洗礼をめぐるっては、きっとはげしい論争がくり返されてきただろうと思われがちです。しかし、実際はその逆です。もちろん、古代教会や宗教改革のころには、いろいろと話題となりましたが、そのような特定の時期を外せば、教会の歴史のなかで洗礼ほど議論されることの少なかったことがらは、ほかにありません。

ところが、20世紀になると、洗礼は急に問題となり始めました。理由は二つあります。一つは、1962年から1965年にかけて開催された第二ヴァチカン公会議で、カトリック教会が、『キリストの体なる教会』はもともと一つであるはずだ、という認識のもとに、これまで500年ほど分かれていた福音主義教会と協調する姿勢へと転じたことです。

もう一つは、これまでほとんど意識されないほどに行なわれてきて、それでいて、ヨーロッパのキリスト教社会を根底から支えてきた幼児洗礼について、福音主義教会の側の神学者であるカール・バルトが、1943年に、これは本当に教会の洗礼としてふさわしいのだろうか、と、疑問を投げかけたことです。洗礼について問うことはそのまま、教会というものについて考えなおすことにつながります。この二つのことがあって、とくに20世紀には、世界の教会は、あらためて、教会について広く考える機会を与えられました。

しかし、バルトが問題を提起したのが第二次世界大戦のさなかであり、日本では、その後あらゆる方面で戦後復興の動きに力を注いでいたものですから、日本の教会には落ち着いて洗礼の問題にかかわるいとまがありませんでした。と、いうことは、これまで教会を成り立たせてきた大切な問題を、あらためて正面からとらえなおす機会があったのに、それを失ってしまったことを意味します。このことは、その後、日本の教会にとって取り返しのつかない痛手となったのではないのでしょうか。

そのためか、日本の多くの教会は、今でも洗礼のことがらにはあまり関心をよせようとしません。けれども、このままいきますと、教会とは何かという点が曖昧になっていくのではないのでしょうか。教会についてきちんとした理解をもてないでいると、教会は混乱します。少しなりとも洗礼について理解を深め、それによって、私たちの教会の進む方向を確認したいのです。

洗礼命令

日ごろ、あまり考えないでいますが、いったい教会はなぜ洗礼を受けるのでしょうか。この問いはとても大切です。そうです。くり返しますが、教会はなぜ洗礼を受けるのでしょうか。答えは、とてもあきらかで単純です。教会の主である、復活なさったイエス・キリストが、そのようにお命じになっているためです。ふつう『洗礼命令』と呼ばれます。そして、洗礼の問題は皆、このご命令から始まります。次のお言葉です。

「私は天と地の一切の権能を授かっている。だからあなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ28・18～20）

ここで命じられているのは、どんなことでしょうか。

①「あなたがたは...洗礼を受けなさい。」

主の教会は、いつも、洗礼を受けなくてはなりません。洗礼を受けても受けなくても、ど

ちらでも教会は選べるという自由は、教会にありません。教会は、洗礼を受けつつ、教会となっていく。別の言い方をすると、教会は、洗礼を受けながら、キリストの名によって洗礼を受けた人たちの交わり、つまり、キリストの体となっていく。

②「すべての民を弟子にしなさい。…あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」

洗礼を受けた人たちは皆、主イエスの弟子とされていきます。洗礼は、主の弟子になる人たちをもたらしていく働きです。つまり、キリストに命じられたことがらすべてを守るように教えられ、主の教えを聞き分けてしたがう人たちが、洗礼を受けられます。この場合、洗礼を受けられる、そして、教えられる、という順序になっている点が大事です。なにもかも教えられ、そして、そのことがすっかりわかったしるしとして、終わりに洗礼を受けるわけではありません。その逆であって、教会の主によって教えられてしたがう生活が今や始められた、そういう生活の始まったしるしとして、洗礼を受かります。

③「すべての民を…。」

「すべての民」というのは、異邦人たちを指しています。つまり、まだ神を知らない人たちに神を知らせつつ洗礼を受け、また、洗礼を受けつつ神を知らない人たちに神を知らせていきます。洗礼を受けることは、伝道していくことと深く結びついています。

④「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受けなさい。…私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

洗礼を受けた人たちは、もはや、自分だけの勝手なあり方のなかにはありません。洗礼を受けることで、「父と子と聖霊」の三一の神の支配のもとにおかれます。伝道によって弟子とされた人のうえには、支配の交代が起こります。その人のうえでは、今はもはや、全生涯をとおして、また永遠にわたって、取り消しの効かない支配の交代が起こります。「天と地の一切の権能を授かった」復活者が、「世の終わりまで」、弟子とされた人と「共にいて」くださいます。洗礼を受けられて、その人はすっかり三一の神にゆだねられて、神のものとなります。

しかし、時間の流れのなかでは、最初の教会は、「洗礼命令」よりも先に、すでに洗礼を受けていました

「洗礼命令」では、かなりしっかり整った内容のことがらが告げられています。でも、「洗礼命令」では、「洗礼を受けなさい、と言われはしても、そのしぐさについては何も語られていません。また、洗礼を受けられるのにどんな準備が必要なのかについても、説明されていません。

と、いうことは、「洗礼命令」を聞かされた人たちは、この「洗礼命令」を聞かされるまえに、洗礼がどういうものであり、また、どのようにして行なわれるかを、すでに知らされていたのです。たとえば、つぎのようなことがあります。

「洗礼命令」がマタイ福音書に記されるようになったのは、1世紀の終わり頃でした。それでも、マタイ福音書とは別のほかの福音書には、「洗礼命令」そのものは記されていないのに、すでに洗礼を受けるできごとのことが書かれています。

マタイ福音書よりも先に、おそらく紀元60年代なかば頃にまとめられたマルコ福音書16章15～16節には、洗礼を行うのは当然であるかのように、次のように書かれています。

「それから、イエスは言われた。『全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は罪に定められる。』」

また、四つの福音書がまとめられるよりもずっと早くに、パウロは、紀元50年代の前半に、いろんな教会に出した手紙のなかで洗礼の大事なことを教えています（ローマ6・3、コリントー12・13ほか）。

それだけではありません。使徒言行録では、そのパウロ自身が洗礼を受けられたことが書かれています。それは紀元31、32年頃です（使徒言行録9・18、22・13）。主イエスが十字架に死なれて、ほとんどすぐの頃にあたります。と、しますと、教会は、この世に教会として形を現した、その最初から洗礼を受けていたことになりましょう。

このようなことを考え合わせると、マタイ福音書の「洗礼命令」によって初めて洗礼が始まったのではなく、この「洗礼命令」が記された時代には、当時のキリスト教団において、すでに洗礼はもうふつうに行われていて、若い教会の発展と密接なつながりをもって成り立っていたのです。

それなら、どうしてなおも、マタイ福音書の記事は「洗礼命令」とよばれて、主による大事なご命令であると受け止められているのでしょうか。それは、キリスト教洗礼は、なにもかもすべて、復活者イエスのできごとが基礎になっているためです。このことを理解するには、キリスト教洗礼が、具体的には、どのようにして成り立ったかを知る必要があります。

洗礼は、いつ、どのようにして始まったのでしょうか

先にも確認したように、教団のなかでは、その最初から洗礼が授けられていました。どうしてそうなったのでしょうか。また、どのようなことがきっかけで、洗礼が形づくられていったのでしょうか。手がかりは、やはり、「洗礼命令」に求められます。

最も大事な点は、「洗礼命令」を命じているのが、復活者イエスであられることです。地上におられるときの主イエスは、だれにも洗礼をお授けになっていません。それに引きかえ、教団は最初から、復活して昇天なさった主を信じる信仰にもとづいて洗礼を受けています。洗礼をとおして、一人の人間が、復活し昇天なさったキリストの、支配領域にゆだねられました。

ゆだねることが、洗礼をとおして起こり、それ以外の仕方で起こるのでないこと理由は、語られていません。

ほとんどの研究者たちの一致した理解からすると、おそらく、事情はつぎのようであったと、考えられています。

イエスご自身がヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことが、最も確かな、洗礼の原型-あるいは、正確に言えば、キリスト教洗礼の原型となりました。

このことは、つぎのように二つの面から考えると、わかりやすいのではないのでしょうか。

一方で、教会は、洗礼者ヨハネの洗礼に込められている三つの特徴を受け継ぎました。

もう一方で、教会は、ヨハネから洗礼を授かったときに主イエスのうえに起こったできごとをとおして、主イエスについて重大なことを知らされ、そのことを教会にとっての中心的なこととして、とても大切にしました。

教会は、洗礼者ヨハネの洗礼に込められている三つの特徴を受け継ぎました。それとともに、主イエスが受洗なさったときに起こった二つのできごとを、とても大切にしました。それによって、教会は、ヨハネの洗礼を乗り越えて、それに替わる、教会の新しいキリスト教洗礼を形づくっていきました

洗礼者ヨハネの洗礼には、それまでのどのような洗礼とも違う、三つの特徴があります。

I 神の支配の到来、ことに最後の審判に備えて、終わりの裁きから救われることを期待します（それに備えて、一回かぎりの洗礼が施されました）。

II 水中に身を沈めて、そこから引き上げられ、罪の勢力とは決別して、赦しのうちに生きることを期待します（自分ではない外からの力によって水に沈められ、また、そこから引き上げられるしぐさが採用されます）。

III 洗礼者の説教を聞かされ、それにしたがって回心を経験した人だけが、洗礼を受けられます（うわべだけでなく、胸中が新しくなるのです）。

洗礼者ヨハネから主イエスが洗礼を授かったとき、ほかの人たちには起こらなかった、ある特別なできごとが主イエスのうえに起こりました。それによって、主イエスについて明かされたのは、つぎの二点です。

①「天が開け、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのを御覧になった。」（マタイ 3・16）-主イエスはいつも聖霊がともなっておられるお方であることが、明らかになりました。

②「『これは私の愛する子、私の心に適う者』と言う声が、天から聞こえた。」（マタイ 3・17）-主イエスはもともと神からでた、神に等しいお方であることが、示されました。

最初の教会は、ヨハネの洗礼に込められている三つの特徴をヨハネの洗礼から引き継ぎ、それに加えて、主イエスの受洗のときに主イエスについて明らかに示された、二つのことがらを合わせて、教会の、新しい洗礼理解を形づくりました。

教会の、新しい洗礼の理解とは、どういう内容のことでしょうか

(1) 主イエスの御名によって洗礼を授かりますが、私たちは、それによって、その名をお呼びする人物、すなわち、十字架に付けられて復活なされた人物に、結ばれます。そして、そのお方は、つねに「聖霊がともなっている」方であり、そして、「もともと、神からでた、神と等しい」方であられるので、洗礼によって、そのような方に結ばれる私たちも、聖霊の賜物をいただき、永遠の神のものとされます。

神の裁きは、今や、主イエスの死と復活のなかへと取り込まれ、そして、受洗者は、そのイエスの死と復活にあずからされることとなります。そのとき、聖霊の賜物をいただいた者には、最後の審判での救いというのは、単に罪が赦されるだけのことでなく、永遠の救いを賜ることを意味します。

そして、事実、聖霊降臨日に、特別なしるしをとおして、受洗者には、実際に聖霊が与えられました。受洗者に聖霊が与えられることにより、イエスの御名による洗礼は、ヨハネの洗礼を乗り越えた、まさに、教会の新しい洗礼となりました（マルコ1・8）。

(2) 教会の、新しい洗礼は、それによって、洗礼を授かった人がキリストに結ばれるようになるだけでなく、それと同時に、洗礼を授かった人がキリストの体に組み込まれるようになることでも、ヨハネの洗礼とは違ったものでした。

ヨハネにも弟子たちはいましたが、教会というようなものを形づくりません。ところが、キリスト・イエスの名によって洗礼を授かった人びとは、そのことによって、すべての人びとが教会とかかわるようになります。すべての人びとが、教会の肢々となります。キリストの体である教団に組み入れられるということが、キリスト教洗礼を重大な歴史的意義の

あるできごととしていきました。

新約聖書ではどこでも、洗礼は、神と人間とのあいだの個人的できごととしての性格をもっていません。洗礼を授かるのは一個人ですが、それでも、その一個人は、キリストに自分をゆだねることによって、一つの人間共同体に組み込まれます。

すでに行なわれていたキリスト教洗礼について、その洗礼のもつ意味を最も的確に説明してくれたのがパウロです。-パウロの説明が、今日なお、教会の洗礼論の中心です

教会は神学よりも古く、したがって、洗礼慣習も洗礼論よりは古いのです。パウロは、洗礼について、とても深く考えました。パウロのほかにも、洗礼について考える人がいなかったわけではありませんが、それでも、あらゆる時代の神学者たちは、いつも、ふたたび、パウロに立ち戻ります。

パウロは、すでに成り立っていた洗礼慣習を揺るがすようなことを言いませんし、変えることもしません。ただ、当時の教会の人たちが洗礼について知っていることがらが、本当はどういうことかを、はっきりさせようとしただけです。ローマ6章3節で、次のように言っています。

「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにあずかる洗礼を受けた私たちは皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。」

パウロにとって、洗礼は、受洗者の生活のなかで、キリストの死と復活が現実のものになる、ということがらです。ローマ6章4節です。

「私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるためです。」

キリストと共に死んで復活すること、つまり、そういうことが、洗礼をとおして、受洗者の人生の新しい特徴となります。でも、そうであるからこそ、受洗者は、洗礼を授かったあとは、あたかも何事も起こらなかったかのように生きていくことはできません。洗礼を授かり、キリストの死と復活に自分をゆだねておきながら、それからあとも罪の力のもとにひれ伏したまま、というわけにはいきません。たとえ罪の力にとらえられているにしても、あるいは、神のみまえでだけ通用する赦しを仰ぐことをしないで、かえって自分の罪の状態にばかり目を留めるようなことがあっても、です。ローマ6章11節。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。」

そして、パウロは、洗礼を授かったあとには、受洗者たちが共にいる「教会」という社会的現実が生じることをも、大事なこととして説明します。コリント一12章12～13節です。

「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様です。なぜなら、私たちは皆、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの霊によって一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったからです。」

受洗者は皆、御霊にあずかっています。具体的に言えば、洗礼を授かることによって、そ

それぞれのメンバー同士の関係が互いに変わっていきます。誰もひとりぼっちの人間ではなく、むしろ一人一人が、洗礼によって与えられた新しい生活を、ほかの人々とつながった生活としてのみ、もつようになります。コリントー12章14～15節。

「実際、体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。」

そして、そのようにして、洗礼をとおして、すべての人が共に同じ品位あるものとなります。コリントー12章24～25節。

「しかし、格好の良い部分はそうする必要はありません。神は劣っている部分をかえって尊いものとし、体一つにまとめ上げてくださいました。それは、体の中に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うためです。」

そして、まさにそのようにして、めいめいが、完全にその人らしい人間となっていくます。言葉どおりに言えば、めいめいは、自分が持っている霊の賜物をたずさえた、人間なのです。コリントー12章29～30節。

「皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。皆が奇跡を行う者でしょうか。皆が癒しの賜物を持っているでしょうか。」

パウロは、キリストの体の肢とされるという一つの秘義のほかには、どんな特別な洗礼の秘義をも知りません。パウロの「洗礼論」と「信仰論」とは一つです。

洗礼のできごとは、それ自体は「秘義」(Mysterium)ではなく、むしろ徹頭徹尾、キリストと呼ばれる唯一の秘義にかかわるものです。キリストが、洗礼志願者に、ご自分の死と、それとともに、ご自分の復活の秘義に真実にあずからせてくださることが起こります。洗礼そのものは、教会のなかへの、取り消し可能な入会儀式より以上のものです。それは、キリストの死を“ありありと思ひ浮かべるといふことが、受洗者の人生において事実として起こることなのです。

したがって、洗礼を授かるにあたって、私たちは、「私は、十字架に付けられ、そして、復活させられた主イエス・キリストを、たしかに、私の救い主として信じ、告白します。」という、信仰の告白を言い表すことになります。そういう信仰の告白を抜きにするとか、割り引くとかすることはできません。そういう信仰の告白を真実に保つところに、健やかな教会が成り立ち、そういう信仰の告白を真実に保てないところには、健やかな教会は育たないでしょう。

洗礼は、もともと、成人洗礼なのです。それなら、幼児洗礼はどのようにして始まったのでしょうか

キリスト教洗礼は、これまでのところから分かるように、もともと、成人洗礼です。十字架に死んで復活なされたイエス・キリストと共に結ばれることを受け入れ、喜びとする人たちに、洗礼が授けられました。

したがって、そのような主に結ばれることを受け入れ、喜びとするまでに信仰の準備が整うために、受洗準備というようなものが重んじられて、それがなされたあとに、洗礼式が行なわれました。2世紀から3世紀頃にかけて行なわれた古代教会の洗礼式は、その点で、とてもみごとでした。ローマに生きていた教会の指導者ヒュッポリュトスという人が、その様子を伝えている記録は有名です。彼の記録によると、受洗準備は3年間にも及ぶのでした。

ところが、その一方で、新約聖書の時代には行なわれていたのかどうか、はっきりしない

のですが、キリスト教がローマの国教になる以前から、つまり、2世紀か3世紀になると、いつのまにか、教会では、幼児洗礼や嬰兒洗礼がおこなわれるようになっていました。それどころか、いつしか、洗礼といえば、成人洗礼をしのいで、この幼児洗礼のことを指すまでに広まっていきました。

幼児洗礼がこのようにも広まるようになった動機としては、二つのことが考えられています。

I もともと、洗礼そのものには、人間の行いではなくて、どこまでも神の愛に根ざした、神からいただく恵みであるという性格が強く込められています。このような洗礼の性格が一方向的に強く主張されますと、成人洗礼のもつ意味合いが弱められて、ついには、幼児洗礼や嬰兒洗礼をも授けるのがふつうになりかねません。

II 教会の歴史が長く続くうちに、終末への期待が次第に薄らいでいきました。終末がすぐにもやって来ると思われていた時代には、幼い人たちが回心して受洗するなど考える余裕がなく、幼い人たちはみな救われていると思われていました（マタイ18・2～3）。

ところが、神の国が勝利をもって訪れるという期待が薄らぎ、光の国と闇の国との併存が続くとすると、なんとしても、闇の勢力から逃れようとし、その手段として洗礼を授かりたいという思いが高まります。それに、生まれてまもなく死ぬ乳児の多いことが、この傾向に拍車をかけました。

古代教会では、幼児洗礼について、どのように対応したのでしょうか

幼児洗礼が慣習となることについては、いろいろな人々が賛否の声を上げました。

テルトゥリアーヌスは、幼児期にあってまだ汚れを知らない幼子は、成長するのを待って成人洗礼を受けるのがいいと、幼児洗礼には反対しました。

オーリゲネースは、幼児でもすでに汚れているのだからと、幼児洗礼をほどこすのに賛成しました。

ヒュッポリュトスは、自分で返事のできない幼児のためには、他の人が代わりに務めるのがいいと、幼児洗礼に賛成しました。

そうこうするうちに、洗礼が、魔術的な手段と理解されるどころか、洗礼志願者を教会のなかで養い育てる働きまでもが失われていきます。そのような風潮のなかで、幼児洗礼や嬰兒洗礼が広く定着していきます。

そのような事情を汲み取って、これを正当化したのが、アウグスティーンヌスでした。彼は、教会の聖なる者たちのあいだで愛と成って働く聖霊（カリタス）が、教会の洗礼を授けられて教会の肢々となる幼児たちを包んで支えていくと、教えました。彼の教えは、幼児洗礼や嬰兒洗礼がいたずらに魔術化されることから、これを救ったこととなります。

アウグスティーンヌスの影響のもと、つい近年まで、いわゆるキリスト教国では、幼児洗礼の慣習を、そのまま、国家の基礎づくりに利用してきました。

カール・バルトは、この傾向に対して、洗礼はもともと教会のことがらであり、幼児洗礼が国家に利用されないように、そして、本来の成人洗礼こそ、洗礼として大切にしなければならぬことを、力説しました。

今日の学びから、私たちは何を考えさせられるのでしょうか

成人洗礼にこそ、洗礼らしさが保たれています。しかし、教会の歴史のなかで、幼児洗礼は守られてきて、信仰告白をして成人会員となるまでの兄弟姉妹たちを支えてきました。そのすべてのことがらに、神の導きと祝福があると信じたいのです。

ついでのことですが、この頃、時に見られる幼児祝福式というのがあります。幼い人たちを祝福するのは好ましいことですが、この幼児祝福式は、教会の「聖礼典」ではありません。したがって、教会の幼児洗礼式と混同してはなりません。

幼児洗礼に反対する立場のドイツの牧師たちが、教会員から幼児洗礼の希望がだされたときには、職務上、幼児洗礼を授けざるをえませんが、自分の家庭の子供たちには、幼児洗礼を授けません。それに代わって、一種の便法として、個人的に考えだされたのが、幼児祝福式です。

『洗礼についての話』②

洗礼のしぐさについて

はじめに

先に、洗礼とはどういうものかについて、考えました。それでは、洗礼はどのように行なわれるのでしょうか。次には、実際に洗礼が行なわれるときのしぐさについて、考えることになりましょう。

(1) 新約聖書のなかでは、洗礼が行なわれるときの方法とか、洗礼は誰によって行なわれるとか、そのような点については、ほとんど何も触れていません。新約聖書の著者たちは、洗礼によって神は私たちにどのような経験をさせようとなさっているのか、洗礼によって私たちの事情はどのように変えられるのか、もっぱら、そういう中心的なことがらを確認しようと努めました。いろんな言い回しや、さまざまな考え方をういて、そのことを、より一層、正確に証言しようと努めました。したがって、今、行なわれつつある洗礼がどのようなものであるか、ということではなく、すでに行われた洗礼によって、今や、私たちは、どのように新しい事情のもとにおかれているか、彼らは、そのことに関心を集中したのでした。

(2) もちろん、そのことは、洗礼のしぐさを軽んじたとか、無視したとか言うものではありません。やがて、教会が定着し、どうやら形を整える教会の時代になると、洗礼式のあり方については、目を見張るような式次第が整えられていきます。それでも、洗礼のもつ意義にふさわしい基本のことがらは、最初の教会の頃から、大切にされていたのです。その基本のことがらというのは、どんなことであつたのでしょうか。

① まず、洗礼については、信仰を言い表して洗礼を志願し、その志が受け入れられて、洗礼を許可されることが、前提になっていました。その志願と許可とのあいだに、どんな時間的へだたりがあつたかどうかは、知られていませんが、洗礼志願者と、それを受け入れる教会という構図は、最初から守られていました。-キリスト教洗礼は、自己洗礼ではありません。

② 洗礼には、水が用いられました。「洗礼をほどこす」というギリシャ語（バプティゼイン）は、もともと、「水に浸す」とか、「水に沈める」という意味の言葉です。水がどのように用いられたかは、つまり、水潜りであるのか、水注ぎ（これは、14世紀になって、西欧の教会で行われるようになった）であるのか、あるいは、そのほかの仕方であるのかは、はっきりしていませんが、キリスト教洗礼は、水を用いての洗礼です。-「流れる水のなかで洗礼を施せ。しかし、流れる水がない場合には、そうでない水で洗礼を施せ。冷水で行う

ことができない場合には温水で行え。どちらもない場合には、水を頭上に、『父と子と聖霊の名によって』三回注げ。」（130～160年ごろのディダケー7・1～3）。-水が用いられるのは、洗礼が、その人物全体に作用を及ぼす、そういう介入が洗礼志願者の生涯のなかに起こったことを示すためです。

③ 洗礼を施すときには、キリスト・イエスの名が呼ばれました。これは、キリスト教洗礼が、ほかのどのような洗礼とも違って、どこまでもキリスト・イエスにあずからされる、独特な洗礼であることを、言っています。-「イエスの名によって」という表現は、そのあと、異邦人世界にキリスト教が広まっていくにつれて、「父と子と聖霊の名によって」と変えられていきますが（この表現は、新約聖書の中では、マタイ28・19で、一度だけ出てきます）、この表現は「イエス」という御名の解釈ですから、呼び名がそのように変えられても、本質的には、変わっていません。

④ 洗礼の後には、その受洗者が、いのりと食事の交わりへと迎え入れられました。-教会の一員となったことを示すためです。

P8

質疑応答要約

《問》 聖礼典として行われるのは幼児洗礼ということだが、日本基督教団ではどうなっているのか。

《答》 日本基督教団は、幼児祝福式も式文に入れてしまっているので、各教会がまごつくのは当然である。幼児祝福式は式文に入れるべきではなかった。

《問》 愛宕町教会としては、基本的には成人洗礼で、各家庭の状況によって幼児洗礼の方が良いというスタンスで良いのか。

《答》 私自身が幼児洗礼を受けており、幼児洗礼が良いと考えている。しかし、「神のもの」とされる、キリストと一つのものとして合わせられた」という感覚をどういう形で自分で納得するか、幼児洗礼を受けた者にはどこかで起こってくるのであり、そこが成人会員としての芽生えの時だろうと思う。両親揃っての意思で幼児洗礼を授けられる子供は幸いだと思う。ただその場合、教会がきちんとその子供をキリスト者として育てなければならない責任を負うことになる。

《問》 もし、幼児洗礼を受けているが信仰告白をしない状況で、もしもの事があった場合にはどうなるのか。

《答》 幼児洗礼だけであっても、洗礼を受けたという事実は一生のことである。ただし、聖餐式については、信仰を言い表すという前提があるので、幼児洗礼だけの者を聖餐式に招くのは控えるべきである。

《問》 カトリックの場合には幼児洗礼が一般的であるが、堅信礼を受けるべきかどうか。

《答》 今の社会問題で、堅信礼を受ける人が少なくなっている。特にヨーロッパでは、洗礼を受けているということで社会の一員になれるという考えがあり、教会ではなく病院付きのチャペルで幼児洗礼を授けてもらうケースが多いようである。ヨーロッパでは、幼児洗礼が教会の事柄なのか社会の事柄なのかが混乱していて、カール・バルトはその辺りを整理すべきと主張した。

《問》 高齢者で認知症になった者が、きちんと信仰告白できるかどうか問題であるが、教会として受け入れることはできるか。

《答》 奨励すべきだと思う。物心のつかない子供の場合、親が信仰的責任を持って育てていくのであるから、成人して精神的に幼児の状況にある人の場合も、連れ添う人が責任を持

って、キリスト者として神の恵みの元においていただきたいとの願いを持ち続けることを、教会は受け入れるべきではないか。どういう状況であっても、自分にとって大事な存在に神の保護があると信じて守り抜く、そういう祈りを神はお聞きくださると思う。

(まとめ文責／宣教部・清藤)

《出席者の感想》

全体研修会に参加して

西條 隆繁

「洗礼について」というテーマで研修会が開催されると聞いて、ある意味で期待をもって参加させていただきました。と言いますのは、日ごる教会でお伺いする牧師先生のお話や研修会等での話題は、聖書を基に良いお話をお聞きしてきているのですが、「洗礼について」と題し、洗礼を真正面から取り上げ学習する場は、これまでほとんど無かったように思うからです。

聖書に書かれているみ言葉は限りなく不変ですが、人の世は日々移り変わっています。少子高齢化が毎日話題となるわが国で、本人の意思確認が難しい高齢者の洗礼に関し、どのように対処すべきか、その心と形を知ることができれば幸いと思っていました。

キリスト教が国教というような国では多分無い悩みでしょう。これは日本特有の問題かもしれませんが、日ごる本人がその心を持っていながら、それを形に表すことが難しい高齢者に対し、教会はどのように臨むのか、そんな想いを、認知症の高齢者を世話している者として、日々感じていたからです。

研修会の講師に、その道の権威者である宍戸達牧師先生をお迎えできましたこと、感謝です。実は、小生、自宅が国立市にあり、国立教会の主日礼拝にかつて出席させていただいたことが数回あり、先生のお話をここで再びお伺いする機会を得、大感謝です。

「洗礼についての話」に参加して

井波 忠志

神が宍戸達先生という教師を愛宕町教会の群れにお贈りくださったことを、まず感謝したい。

信仰の歩みではいくつもの大切な言葉が私たちを取り囲んでいるが、意外と分かったように使っている言葉の的確な捉まえ方が出来ていないと、自分自身感じるが多々ある。

例えば「教会」。「キリストの御体、私たちはその肢体。その教会がキリストの満ち満ちた身丈をいただいてキリストの栄光を現わす」。言葉にすると何となく解かった気がするが、では一体それは何なのか。その内で自分自身は何なのか。何をすべきなのか。どうあるべきか、そしてどうなのか。その他、「礼拝」「贖い」「救い」「祈り」、次々と？付きである。

そんな自分にとって、今回の「洗礼についての話」と題した研修会は、まことにありがたい機会であった。

私が若い頃過ごした教会では、献児式はあったが幼児洗礼式は無かった。この愛宕町教会に植えられてからも幼児洗礼には否定的であった。信仰告白をもってその完成を見るというのは納得だが、ならばその信仰告白を成し得る時に成人洗礼を受ければ良いという考え方があった。

しかし、今回の研修会で幼児洗礼にも相当の意義が与えられているという達先生のお答え。成人した方が何らかの理由で信仰告白を成し得ない時、その人を囲む人々の信仰をもっ

て信仰告白とし洗礼に与れることは、愛宕町教会でも認められつつある。

それとは異なるが、親またはそれに相当する者の信仰をもって幼児洗礼に与ることをよしとすることも、勿論私たちの牧師の指導のもと、もっとはっきりと表明していくべきかと思わされた。

洗礼の予約か？ 予約という行為にも一定の効力はある。八日目の割礼か？ 成人までは民に数えられないが神の支配に従うという神の民の表明か。今後の宍戸俊介牧師の指導に与りたい。

P9

信仰告白

弓田美和子

私が洗礼を受けようと思ったのは、小学一年生の時でした。なぜかと言うと、私が小学一年生の時に、当時小学五年生だった姉が、クリスマスに受洗をしたのを見て、私も小学五年生のクリスマスに受洗しようと思ったからです。

私は、クリスマスにしか洗礼が受けられないと思っていました。イースターにも洗礼を受けられると知ったのは、荻野和ちゃんがイースターに受洗した時でした。ちなみに、いつでも受洗できると知ったのは、この信仰告白を書いている時でした。

クラスの友達は、「神さまなんかいな」って言うけれど、私は神さまがいると思います。なぜかと言うと、母や祖母が、小さい頃からよく神さまの話をしてくれたり、家族が全員クリスチャンだからです。

小学六年生になっても、中学生になっても、高校生になっても、大人になっても、神さまの招きに応え続けるクリスチャンでありたいと思います。

(2018年12月23日クリスマス礼拝にて受洗)

受難節聖書全巻リレー通読報告

御言葉が聞かれる、善き業としての聖書通読

2019年4月7日(日) 礼拝後、開始の祈り

2019年4月9日(火) 午前7時 通読開始

～18日(木) 午後10時 無事終了

3年目の聖書通読には47名が参加し、その内、他教会員が3名、求道者が1名おられました。感想をお寄せいただいた中から、他教会員の方の感想をご紹介します。

聖書通読に参加して

飯室綾子(甲府教会員)

他教会員ですが、日曜に仕事が入る際に、こちらの夕礼拝にお邪魔しております。今回、夕礼拝の際にポスターを見かけ、大変面白い取り組みであると感じ、参加させて頂きました。

講壇で大型聖書を音読することは滅多にありませんので、貴重な体験をさせて頂きました。読んだ箇所がイザヤ書で、また、たまたま強風の日でしたので「もみ殻が大風に、枯れ葉がつむじ風に追われ(17章)」など、情景が現実と重なるようで不思議な感覚がしました。しかし、外は強風でも会堂はステンドグラスで黄色とも金色ともつかない光が入って、落ち着いて一つ一つ丁寧に読むことができました。

黙読もですが、音読することの大切さも再確認致しました。有難うございました。もしまた行うとのことでしたら、参加を検討致します。

元夏期伝道実習生 伝道報告会報告

6月30日（日）礼拝

山田詩郎牧師（名古屋北教会）を迎えて

2012年夏期伝道実習生だった山田詩郎牧師をお迎えして、礼拝、その後伝道報告会の時を持ちました。

愛餐会・伝道報告会で、現在仕えておられる名古屋北教会（中部教区）のこと、牧会者としての歩み、伝道の取り組みについてお話ししていただきました。共々に教会の伝道の業に仕える恵みを分かち合う恵み豊かな時でした。

《礼拝説教》「心の貧しい者が幸い？」マタイによる福音書5章3節

2012年「夏期伝道実習感謝激励会」で賛美した聖歌「未だ見ぬ地」を再び賛美して散会。

P10

2019年度夏期伝道実習報告

愛宕町教会での夏期伝道実習を振り返って

東京神学大学大学院1年 堤 健

主の御名を賛美いたします。

I. はじめに

今年の5月下旬、東神大学生寮の私の部屋に1通の葉書が届きました。差出人のお名前を見て驚きました。「日本基督教団愛宕町教会 宍戸俊介」とあったからでした。大学から今年度の夏期伝道実習派遣先を告げられるよりも先に頂いた宍戸先生からのお葉書によって、私は今年度の夏期伝道先が愛宕町教会であることを知ったのでした。自分が経験する・しない、に関係なく、「愛宕町教会の夏期伝」を知らない東神大生はおそらくいないでしょう。私もその一人でした。「愛宕町...、あの、うわさの愛宕町教会か...」。すぐさまインターネットで検索し、白い十字架の塔の姿を目にした瞬間、2年前の秋に参加しました教団の山梨伝道キャラバンの思い出が鮮やかによみがえってきました。と同時に、神様のお導きを確信いたしました。

その後7月初旬、床屋さんに行き、夏期伝に備えるべく、いつもより髪を短めに整えてもらいました。

II. 夏期伝の30日間

8月3日の夕刻、愛宕町教会に到着した私を、宍戸先生が笑顔で出迎えてくださいました。教会内と牧師室を案内された後、生活の場となった教育館で荷物を整理し、翌日からの準備をしているあいだ、私は不思議と落ち着いていました。8月4日の主日早朝礼拝説教を皮切りに、いよいよ夏期伝の日々が本格的にスタートしました。午後の歓迎会では、皆様の温かな雰囲気にもまれて証しをさせていただき、讃美歌453番「きけやあいのことばを」を歌わせていただきました。2年前の伝道キャラバンにおいて、愛宕町教会礼拝堂にて東神大生全員で歌った思い出の讃美歌でした。落ち着いていました。未だ知らぬ、嵐の前の静けさの中にいたのでした。

この8月4日以外にも、主日には8月18日に甲府教会で、9月1日に愛宕町教会で礼拝説教の機会を与えられたのですが、帰京後、同級生のご母堂が甲府教会での説教をお聞きくださっていたことを知り、驚くとともに神様によるつながりの恵みに感謝いたしました。

8月5日から7日までの教会学校のキャンプでは、特に幼小科の生徒さんたちのパワーと勢いに、ただただ圧倒されながら、キャンプファイヤーでの証しと6日、7日の早朝礼拝での説教を担当しました。教会学校では25日の合同礼拝でも説教の機会が与えられました。

キャンプから戻ると、ついに嵐がやって来ました。10日から始まった愛宕町教会夏期伝名物「聖研家庭集会」という名の嵐は全9回に及びました。「ガラテヤの信徒への手紙」の連続講解に立ち向かうという貴重な体験をさせていただきました。毎回、信徒の方から出されるご質問やご意見にたじたりとなりながら、宍戸先生のご批評とご助言により、なんとか終わることができたというのが実情でした。こんなにも未熟な私の話に真剣に耳を傾け、お交わりのときをも与えてくださる皆様のお姿を脳裏に、初回以降、反省と自戒を繰り返しながら、「今度こそは」という思いで毎回臨んだのですが、結果の出ない日々が続きました。3回目が終わった頃から、「『落ち込んでいる暇すらない』という現実が、かえって自分にとってはなぐさめとなっているのではないか」と思えるようになりました。このとき、愛宕町教会夏期伝の真髄に私は触れることができたのではなかったでしょうか。

上記以外にも、主日ごとの祈りの小団、木曜日ごとの第二・第三祈祷会、婦人会・壮年会での自由発題、教理入門講座、聖書に親しむお母さんの集い、マルコの会、CS教師会、役員会等々に参加する機会が与えられました。

III. 感想

確かに、決して楽ではなかった30日間ではありました。しかしそれは、言葉では言い尽くすことのできないほどの多くの学びと恵みと感謝に満ちた30日間でもありました。礼拝をはじめとして、教会学校を含めた教会全体としてのありがた、教会学校の先生方および教会員個々人の方々の伝道への熱意と姿勢とお働き、教会の内外での宍戸先生のお働きとそのお姿、さらには移動の際の車中で先生が語ってくださった聖書とは直接関係のない話までのすべてが、私にとっては気づきと学びの機会となってくれました。

自らの、聖書に向き合う姿勢の甘さに加え、特に黙想時において、どうしても自分の思い込みやこれまでに得た知識が先に顔を出してしまうという悪癖も明らかになりました。しかし、ひたすら御言葉に向き合ったその結果として与えられる「御言葉を語る喜び」を実感することができた点が、今回の最大の学びであったように考えています。

愛宕町教会での夏期伝、それは、宍戸牧師をはじめ教会員の皆様の、厳しくも温かい見守りと励まし、そして熱い祈りに支えられての30日間でありました。

IV. おわりに

言い尽くすことのできない感謝の念を胸にしての帰京後、夏期伝の余韻がまだ冷めやらぬ9月の5日、あまりにも突然に、大住雄一学長が天に召されたとの報に接しました。深い悲しみと寂しさのうちに、まもなく後期が始まるうとしています。大住先生に直接、夏期伝のご報告をしたかったという思いが今も強く残っています。しかし、神様の御心を信じ、御心に信頼し、東神大での残された日々、これまで以上になお一層、学びと奉仕に打ち込む決意が今の私には与えられています。

宍戸俊介先生、尚子先生をはじめ、愛宕町教会の皆様のご健康が守られますとともに、皆様と愛宕町教会のうえに、神様の御祝福と御顧みが豊かにありますよう心よりお祈りいたします。またお目にかかれまます日を願っております。略儀ながら、本報告をもちまして皆様への御礼状とさせていただきます。本当にありがとうございました。主に在って。

編集後記

▼今年の教会全体研修会は宍戸達先生をお迎えして実施いたしました。洗礼についてのその講演内容を全文掲載いたしました。これまで正面切って洗礼をとりあげ、皆で聞く機会はなかったと思います。無駄にすることなく信仰生活に生かしていきたいと思います。個人的に

はお話を聞いて、洗礼に導かれ礼拝共同体の中に置かれる幸いを一層強く感じました。また幼児洗礼、高齢者の洗礼について、役員会が責任を担うことを深く受け止めました。

▼教会員を見渡すと、礼拝を守り交わりに参加することの困難な方が増えて来ていることを実感します。このことを教会はどう克服するかが課題です。いよいよクリスマスを待ち望む時期を迎えます。多くの兄弟姉妹とクリスマスをお祝いできる教会となるよう願っております。

(K.S)